

<実践報告・調査報告>

多様な学習スペースを活用した学習支援・教育支援の試み —雄飛館ラーニングコモンズにおける新たな学びへの支援—

千葉 美保子¹・松井 きょう子²・中沢 正江²

雄飛館ラーニングコモンズでは、「共に学び、共に創る」をキーワードに、学生の主体的な学びを促進し支援する学習環境を提供している。本学では、学生が身に付けるべき学びのスタイルを「探求型問題解決能力」であるとした。これはラーニングコモンズで展開されるべき「主体的・能動的な学びのスタイル」である。この探求型問題解決を育てる力、つまり、問題を自ら発見し、解決方法を考えまたは創作し、実践しながら検証するという学習活動の実践を、本学では「アクティブ・ラーニング」と呼んでいる。本稿では、ラーニングコモンズのコンセプト設計の試みと、その過程で本学学生が求める学習環境・学習支援ニーズに関する調査の概要および調査結果を紹介し、教職協働・部局横断で構築した本学ラーニングコモンズのコンセプト設計を提示し、ラーニングコモンズにおいて展開する多様な学習スペースを学習形態に応じ活用する、学習支援の取り組み事例とその成果を報告する。

キーワード：学習支援、教育支援、主体的な学び、ラーニングコモンズ

1. はじめに

近年、国内の大学図書館内や単独施設として、滞在型学習支援環境の設計が進められている。とりわけ、グループワークやディスカッションなどができる学習環境「ラーニングコモンズ」の設置だけでなく、学生の主体的・能動的な学習をより活性化させるべく、多様な空間やコンテンツを提供する環境を整備することに加え、学生の主体的な学習を支援するために人的な支援体制が展開されることが望まれている。

京都産業大学（以下、本学）雄飛館ラーニングコモンズでは、共に学び、共に創る「共創空間」をキーワードに、アクティブ・ラーニングを実現する学習環境の提供、および正課内外の学習活動の支援を行っている。

アクティブ・ラーニングとは、学生自らの思考を促す能動的な学習であり、学生が能動的に読解、ライティング、ディスカッション、問題解決などの高次思考課題に取り組む学習活動である。この学習は、学習者同士による問題解決プロセスへの参加や対話により知識を構築するという考え方を背景としている（Bonwell and Eison 1991, 溝上 2007, 岩崎・池田 2014）。

本学では、アクティブ・ラーニングを実現する学習環境として、2013年10月に雄飛館にラーニングコモンズのオープンを目指し、各学部・各部局からメンバーを集め組織横断の「ラーニングコモンズ/グローバルビレッジ・プロジェクトチーム」を立ち上げた。その下に、より実行的な存在として、教職協働・部局横断で雄飛館ラーニングコモンズの具体的な仕様を検討するワーキング（以下、「ワーキング」と言う）を作り、次のプロセスによって議論を重ねた。

- (a) 雄飛館ラーニングコモンズにて、促進すべき学習活動のイメージ像を具体化すべく、既存の本学学生の学習活動をブレインストーミングし、その結果を整理し、イメージ像を具体的に共有した（2.1.1に詳述）。
- (b) (a) で学習活動イメージを共有した上で、この学習活動イメージに仮の名称「クリエイティブな学び」を付した。この「クリエイティブな学び」をどの程度本学学生が好んでいるのか、「クリエイティブな学び」をする学生には、ある程度の学習習慣があるのか、「クリエイティブな学び」を好む学習者達が好む学習環境はどのようなものか（どのような環境を雄飛館ラーニングコモ

¹ 京都産業大学 学長室グローバル推進室、² 京都産業大学 学長室・教育支援研究開発センター

ンズでは実現すべきか)、等について参考情報として、簡易の質問紙調査を実施した(2.1.1～2.1.4に詳述)。

- (c) (b) で実施したアンケートの平均値データや自由記述データを参照し、(a) で合意した学習活動イメージを、より明確化し定義にまとめた。その上で、雄飛館ラーニングコモンズで展開すべき人的支援、展開すべき学習空間の具体的なイメージ(フロア構成)を検討し、雄飛館ラーニングコモンズの設計案を作成した(2.1.4および2.2に詳述)。現行の人的支援については、2.2.2及び3に述べ、4で、具体的な実践事例と成果を述べている。

このようなプロセスを経て、具体化された設計案をワーキングから、前述のプロジェクトチームに提案し、プロジェクトチームの承認を経て、さらに上位会議であるグローバル化推進プロジェクトチームに提案し、最終的には、理事会の承認を経て、実現された。

設計案の最も根幹となる、雄飛館ラーニングコモンズで推進すべき学習活動、すなわち「本学にとってのアクティブ・ラーニング」は、以下の通り合意されている。

アクティブ・ラーニング：予測困難な時代において、生涯にわたって、探求型問題解決を行う力を養う、探求型問題解決の実践(以下の①～③の能力を身につける学習活動)

- ① 自身の専門領域を越えて知識を獲得する力(領域横断知識獲得力)：異なる専門領域を持つ学生/教職員とのディスカッション、異なる専門領域を持つ学生/教職員によるセミナー・イベントへの参加、資料検索、調査によって培われる、アンテナを張る力、早い反応力、情報収集力、データ分析力、発想力、論理的思考力
- ② 多様な背景(前提知識・信念体系)を持つ人々に対し、自身の意見を表現する力(領域横断表現力)：異なる年代(典型的には社会人、地域の方)に対する表現活動(イベントを含む)、異なる専門領域を持つ学生/教職員とのディスカッション、ICTを活用した分かりやすいプレゼンテーション、論理的で分かりやすいレポートの作成、各種広報物の作成によって形成される、交渉力、説得力、表現力、アイデアをカタチにする力、論理的思考力
- ③ 協働者と共にアイデア(問題の定式化・解

き方・解)を創り出し洗練する力(協働創造力)：ファシリテーション、グループ学習、ディスカッション、イベント企画・運営・調査・広報を通じて培われる巻き込み力、チームワーク力、場作りの力

つまり、問題を自ら発見し、解決方法を考えまたは創作し、実践しながら検証するという循環が常在する「学生が相互に刺激を与えながら知的に成長するための「共創空間」の中で育まれるものである。図1は探求型問題解決力を身につけるための①～③の能力を図解化したものである。

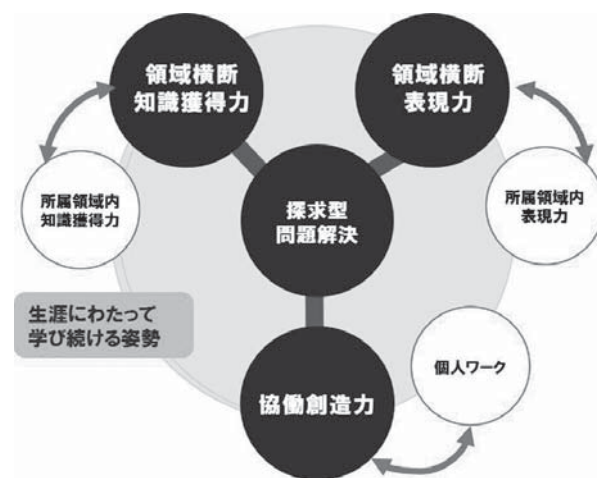


図1. 探求型問題解決を支える3つの力

本稿では、第2章にて教職協働・部局横断で構築した雄飛館ラーニングコモンズのプロセスとそのプロセスの結果構築されたラーニングコモンズのプロセスを述べる。第3章では、2章で述べたコンセプトに基づき、ラーニングコモンズにおいて展開する学習支援体制について言及し、第4章において学習支援・教育支援の取り組み事例と成果を報告する。そして、第5章において現状の問題点と今後の課題について考察する。

2. コンセプト設計に向けた取り組み

2.1. 本学における学習環境調査

先述のように、本学では教職協働・部局横断で構築した雄飛館ラーニングコモンズのプロセス設計を進めた。その議論をより具体化させるために、利用する学生の学習環境ニーズを確認すべく、以下のアンケート調査を実施した。

2.1.1. 学習環境改善に向けた学習活動調査

本アンケートの目的は、それまでワーキングで

表 1. アンケート項目一覧

	3.5以上 (N=337)	中間 (N=1673)	1.5以下 (N=252)	全体平均 (N=2262)
1. 学習時間について				
(1-1) 私は、授業時間以外に授業に関する学習時間を、週あたり2時間以上取っている(年平均)	2.68	2.60	2.46	2.60
(1-2) 私は、授業時間以外に授業に関する学習時間を、週あたり5時間以上取っている(年平均)	1.94	1.90	1.77	1.89
(1-3) 私は、授業で学んでいるテーマ以外に、自分で学習したいと思ったテーマについての学習時間を、週あたり2時間以上取っている(年平均)	2.46	2.05	1.88	2.09
2. 学習時間の過ごし方について				
(2-1) 音楽を聴きながら学習するのが好きだ	2.39	2.36	2.30	2.36
(2-2) 教科書に書いてある事をそのまま覚えたり、理解したりすることにより、誰も答えを知らない問題に取組む方が好きだ	2.55	2.14	1.62	2.15
(2-3) 紙もペンも使わず、じっくり考えを深めるのが好きだ	2.55	2.14	1.62	2.15
(2-4) 受験勉強のように、ひたすら解き方について、習熟(上達)するタイプの学習が好きだ※	2.34	2.25	1.97	2.23
(2-5) 静かで、ピンと張りつめた空気の中の方が学習しやすい※	2.34	2.25	1.97	2.23
(2-6) さわさわわしている、カフェ等の方がリラックスできるので学習しやすい	2.24	2.20	2.02	2.19
3. 複数人(グループ)で利用できる、モニター、ホワイトボード、可動式の椅子、机が配置された空間ができたとき、貴方は、その場所を誰と、どのように使いたいですか?(自由記述)				
(3-1) 誰と				
(3-2) どのような目的で				
(3-3) 何をどのように使って(利用する)				
4. 本学在学中に身につけた能力について、在籍期間に見合った成長があったかどうかをお答えください。				
(4-1) 私は、入学時に比べ、レポートや論文の書き方について、十分上達した	2.67	2.49	2.36	2.50
(4-2) 私は、入学時に比べ、グループで学習する方法について、十分上達した	2.64	2.58	2.50	2.58
(4-3) 私は、入学時に比べ、自分の学習成果や考えについてプレゼンテーション(表現)する方法について、十分に上達した	2.61	2.40	2.35	2.43
(4-4) 私は、入学時に比べ、意見が対立する他者を説得する方法について、十分に上達した	2.52	2.23	2.12	2.26

※は反転項目のため、数値は反転後のものを掲載

議論されてきた内容に基づいて決定された。ワーキングでは、まず、(1)「どのような学習活動を本学のラーニングコモンズで促進したいか」ということについてブレインストーミングを行い、(2)「地域や社会における実問題のようなそもそも解が存在するかどうか分からない課題に取り組む学習」や、「正課外の活動のために学内で実践されているグループワーク」、「受験勉強に代表されるような暗記型の個人学習ではない学習活動」等と、活動イメージを共有し、(3) それらの総称として「クリエイティブな学び」という仮の名称を付けた。そして、ワーキングにてラーニングコモンズの什器や環境属性を設定する際の議論に参考とするデータとして、(a) この「クリエイティブな学び」と仮称した学びを「好んでいる学習者(以下、「クリエイティブな学びを好む群」)」がどの程度学内に存在するのか、(b) 「クリエイティブな学びを好む群」が、「どのような什器導入を望んでいるのか」等、どのような学習環境を好んでいるのかについて、アンケート調査を行った。

2.1.2. 調査方法

調査には、POST(学内イントラネット上電子掲示板)を使用し、以下の期間・方法で実施した。

調査期間：2013年5月8日～2013年6月1日

調査対象：本学に在籍している全学部学生・院生

有効回答数：2,262件(回答率17.8%)

アンケートでは、所属学部・学年、性別などのフェイスシート(自由記述を含めた4項目)のほか、学習スタイル、学習環境に関する自由記述を含めた計20設問への回答を「そう思う」、「どちらか」というと「そう思う」、「どちらか」というと「そう思わない」、「そう思わない」の4件法で求めた(設

問項目は表1の左側を参照)。

そして、有効回答数2,262件の中から、当時ワーキングにて議論されていた「受験勉強を好まない」等の具体的な学習イメージを参考に「(設問2-2)教科書に書いてある事をそのまま覚えたり、理解したりすることにより、誰も答えを知らない問題に取り組む方が好きだ」、「(設問2-4)受験勉強のように、ひたすら解き方について、習熟(上達)するタイプの学習が好きだ(反転項目)」の2設問の平均値が3.5以上の群と、1.5以下の群を作成した。3.5以上の群を、「クリエイティブな学びを好む群(N=337)」、1.5以下の群を「クリエイティブな学びを好まない群(N=252)」とし、1.5以上、3.5未満の群を「中間群(N=1673)」とした(表2および表1の右側を参照)。

ワーキングが議論を進める中で、「学生は図書館では学ぶが、ラウンジのような空間では学ばないのではないだろうか」という懸念が生まれたため、以下のような意図で設問を設定した。クリエイティブな学びを推奨すると、学習時間が減るのではないかという漠然とした不安があったため、「クリエイティブな学びを好む群」が、他の学生に比べ、学習時間が長いのか、短いのかについて検討すべく設問1を設定した。次に「クリエイティブな学びを好む群」が、どのような学習スタイルを好んでいるのかを、設問2で求めた。また、どのような什器導入を望み、どのような学習環境を好んでいるのかを設問3において調査した。そして、雄飛館ラーニングコモンズにおいて、展開すべき

表 2. 設問 2-2, 2-4 結果一覧

	1	2	3	4
(2-2) 教科書に書いてある事をそのまま覚えたり、理解したりすることにより、誰も答えを知らない問題に取組む方が好きだ	418(18%)	961(42%)	632(28%)	251(11%)
(2-4) 受験勉強のように、ひたすら解き方について、習熟(上達)するタイプの学習が好きだ※	194(9%)	713(32%)	818(36%)	537(24%)

※は反転項目のため、反転後の数値を掲載

学習支援サービスはどのような部分に力点をおくべきかについて調査するべく、設問4において学生が自認している学習機会の有無を確認した。

2.1.3. 調査結果概要

本アンケート調査を通じ、以下の結果が得られた。

(1) 学習時間について

「クリエイティブな学びを好む群」の学習時間について、調査の結果、全体的に平均値を下回るものの、他の学生に比べ、著しく学習時間が短いという結果は得られなかった(表1、設問1-1～1-3を参照)。

(2) 学習時間の過ごし方について

音楽が流れている空間や、静かな空間での学習を好むかどうかに関しては、「(設問2-1) 音楽を聴きながら学習するのが好きだ」、「(設問2-5) 静かで、ピンと張りつめた空気の中の方が学習しやすい」、「(設問2-6) さわざわしていても、カフェ等の方がリラックスできるので学習しやすい」により調査した。結果、「クリエイティブな学びを好む群」と、「クリエイティブな学びを好まない群」ともに平均値よりも低い値が導きだされ、多くの学生が背景音のない学習空間を希望していると考えられた。加えて、「(設問2-3) 紙もペンも使わず、じっくり考えを深めるのが好きだ」という設問では、「クリエイティブな学習を好む群」が平均値をわずかながら上回っており、彼らが自らの考えを深め、発信するのに適した空間を設計する必要があることがワーキングにて合意された(表1を参照)。

(3) 学習環境について

「クリエイティブな学びを好む群」が、どのような什器導入を望み、どのような学習環境を好んでいるのかを自由記述形式の設問3において調査した(設問項目は表1の左側を参照)。

結果、「クリエイティブな学びを好む群」の多くがモニター(回答数52件/182件)やホワイトボード(回答数102件/182件)を囲みながら友人たちや同じゼミ生とディスカッションを交えながらの学習を好んでいると考えられる。さらに少数ではあるが、「意見の合わない人」や「留学生」、「面識のない人物・さまざまな世代の人々」とともに議論を交わすことを希望している声も見られた。

(4) 学習支援ニーズについて

設問4では、学生自身の成長実感の有無を通じて、雄飛館ラーニングコモンズにおける学習支援の必要性、展開すべき学習支援サービスはどのような部分に力点をおくべきかについて調査した。結果、本学学生は「期間に見合う成長」を、どの4項目についてもそれほど感じておらず、満遍なくサービスを提供する必要性をワーキングにて合意した。

2.1.4. 調査結果から得られるコンセプト設計への示唆

以下、アンケート調査結果をもとに、「クリエイティブな学びを好む群」が、どのような学習スタイルを好み、どのような学習環境を望んでいるのかについて考察する。

(1) 学習時間について

設問1の結果を通じ、「クリエイティブな学習を好む群」は他の学生に比べ、著しく学習時間が短いという結果は得られなかった。この事により、クリエイティブな学びを推奨すると、学習時間が減るのではないかというワーキング内の不安が解消され、雄飛館ラーニングコモンズにおいてクリエイティブな学びを推進することにワーキングが改めて合意し、コンセプト設計を進めた。

(2) 学習時間の過ごし方について

設問2を通じて、雄飛館ラーニングコモンズにおいては学習空間としての緊張感を維持しながらも、論を交わしやすいリラックスした学習空間を提供することを目指した。また、ラーニングコモンズの一部をオープンホールにすることにより、各グループのディスカッションの様子がダイレクトに観察可能な「みる」、「みられる」空間を設計した。さらに、「クリエイティブな学習を好む群」が自らの考えを深め、発信するのに適した空間を設計する必要がある。ラーニングコモンズでは、自ら学び、自分の考えを深化させることに適した空間として、クリエイティブスペースを設計し、展開している。

(3) 学習環境について

本アンケートでは、自由記述により学生が希望する什器等の情報を得ることができた。特に「クリエイティブな学習を好む群」は、モニターやホワイトボードが常設され、かつ学習スタイルに応じてレイアウトが変更可能な空間を好んでいると考えられ、ラーニングコモンズにおいては、レイア

ウトのアレンジが可能な空間づくりに努めた。

ラーニングスペース（チーム作業）に備え付けのモニタとダイナー形式の椅子、作業のし易い広い机とホワイトボードを常設した。さらにプロジェクトを活用した発表（練習）の場を求める声に応え、パフォーミングスペースやラーニングスペース（セミナー形式）を展開している。具体的なスペースレイアウトに関しては2.2.に詳述している。

(4) 学習支援ニーズについて

設問4を通じ、本学学生は「期間に見合う成長」を、どの4項目についてもそれほど感じていないことが予測されたため、満遍なくサービスを提供することで合意した。特に「ディスカッション」（設問4.4）については、「期間に見合う成長」が他の項目に比べ、平均値ベースで低かったことを受け、ワークショップや本学でファシリテーションを促進するF工房と連携したイベントの実施等を積極的に推進することに合意した。この結果を基に、ワーキングにおいて議論し合意したことが、現在の雄飛館ラーニングcommonsにおける学習支援サービスや、ラーニングcommons学生スタッフがディスカッションを多く含んだワークショップを展開していることに繋がっている。

運用後の具体的な支援展開に関しては、2.2.1および4に詳細を述べる。

2.2. コンセプトの構築

以上のアンケート調査を参考にしながら、ワーキングの議論の結果、本学では、雄飛館ラーニングcommonsをディスカッションやプレゼンテーションといった相互理解のために社会的に必要な活動を日常的に行うことで、予測困難な時代において最善策を導くための基礎力「探求型問題解決力」と、主体的に学び、考えるという学習態度を養う場として展開している。

2.2.1. ラーニングcommons・フロアコンセプト

このコンセプトに基づき、さらに以下のフロアコンセプトを設計し、スペースを展開している¹⁾。

- (1) ラーニングスペース：主体的な学び合いを促進する。プロジェクトや模造紙の利用を想定したセミナー形式と32inchモニタを常設し、グループでの作業が可能なチーム作業スペースに細分化されている。
- (2) クリエイティブスペース：多様な人々と協働する力を養う。ホワイトボードと模造紙を広

げることが可能な正方形のテーブル、6名掛けのソファが8ブース設置されている。さらに、カウンター形式のスペースを設置している。

- (3) パフォーミングスペース：多様な人々から知識を獲得し、多様な人々に情報を発信する力を養う。可動域の高いイスとテーブルを配置し、プロジェクトが常設されており、最大100名の収容が可能である。イベント・成果報告会等で利用されている。

そのほか、よりリラックスした環境で作業を行うことができる「ワークショップスペース」を各階に配置している。各スペースは通常時は学生の正課外の学習空間として開放され、公開講座や授業、セミナー等でも専門スタッフに事前相談を行うことで利用可能である（図2）。

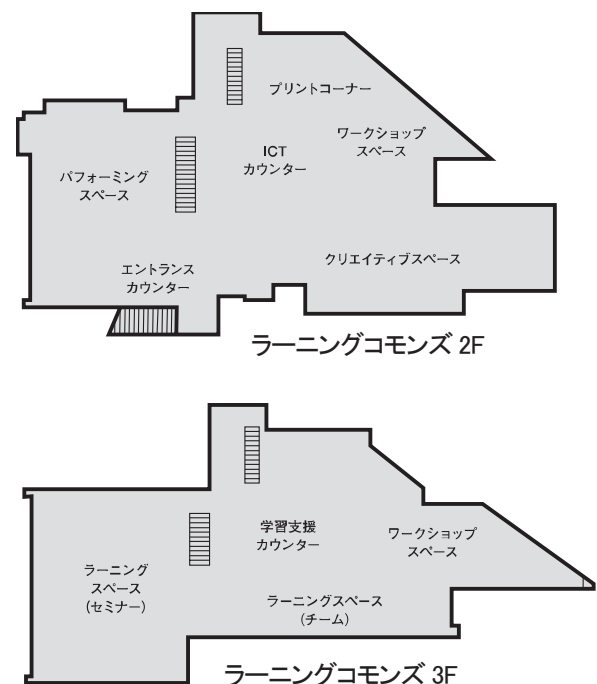


図2. 雄飛館ラーニングcommonsのフロア構成

2.2.2. 学生主体による人的支援

雄飛館ラーニングcommonsでは、ラーニングcommons内に3箇所支援カウンターを設置している。まず、2階入口付近には、総合案内を目的としてエンタランスカウンターを配置し、学生スタッフによる総合案内や利用者にとって常に快適な学習空間を維持するための環境整備、ラーニングcommons見学ツアー等が実施されている（図3）。

さらにラーニングコモンズ学生スタッフたちは、探求型問題解決力を身につける活動を積極的に進め、セミナーやイベントの企画運営をボランティアとして行っており、日々学内外への学生にとって最適な学習環境を創り出す姿を体現している²⁾。

また、同2階奥にはICTカウンターがあり、ここでは本学情報センターより派遣されているMiCSと呼ばれる学生スタッフが利用学生に対するノートPC、iPad mini、55inch モニタなど情報機器の貸出、トラブル対応を行っている。

3階には学習支援カウンターを配置し、常駐する学習支援員が、ラーニングコモンズで実施するアクティブ・ラーニング型授業やイベントでの、効果的なレイアウト・ICT 機器に関する相談対応を行っている(3に詳述)。



図3. 学生スタッフによる館内案内

3. 学習支援カウンターの役割

先述した学習支援カウンターでは専門知識を有した学習支援員(学長室嘱託職員)が常駐し、日本語/英語のライティング・プレゼンテーションを中心とした学習支援サービスを提供している。

本学の教育施策の特徴として、教学センターに所属し、学生の履修相談から学生生活全体への相談・サポートを行うピアサポーターや、ファシリテーションを展開するF工房など、教職協働の修学支援(児玉ら, 2012)に加え、学生による学習支援が充実している点あげられる(大谷ら, 2014)。これら学内の支援機関は、イベントの共催や連携関係を構築する取組が進められているが、通常は各支援機関が独自の運用を持っていることから、横の繋がりを強化していく必要がある。ラーニングコモンズ学習支援カウンターは、その媒介拠点としての役割を目指している。

以下では特に学習支援カウンターが実践してい

る、学習支援・教育支援の試みを紹介する。

3.1. 学習支援

学習支援カウンターでは、ライティング、ディスカッション、プレゼンテーションといったラーニングコモンズで推奨される学習活動に関わるノウハウを供給する支援スタッフが常駐し、(1)日本語/英語ライティング・プレゼンテーションの個別相談対応、(2)日本語/英語学習関連のワークショップの実施、(3)ICT機器の利用相談を通じて、学生に対する学習支援を行っている。さらに、学習支援カウンターはグローバル人材育成推進事業(現:経済社会の発展を牽引するグローバル人材育成支援)の一環として、平成26年度より導入された英語eラーニングシステムのヘルプデスクとして、ICTの知識を有する専門職員によるサポートを行い、幅広い学習支援を展開している。以下では展開されている学習支援について説明する。

3.1.1. 個別相談対応

個別相談対応は、学生自らが考え、解決策を発見する力を促進させるべく、多様な学習スペースを活用し、ニーズに応じた支援を行っている。

相談日は月曜日から金曜日(祝日・大学休業日を除く)の午前9時から午後16時30分まで、相談時間枠は1回あたり30分と設定し、原則前日の12時までに専用のメールフォームから申し込むことになっている。秋学期より、日本語のみ飛込みでの相談対応も実施している。事前予約制、かつ事前資料送付を推奨することで、細やかな支援を実現している。

対応において、相談者が持参した文章資料に対して、添削や代筆、ネイティブチェックなど、いわゆる「朱入れ」をとともなう指導は行わない。

相談者である学生との「対話」を重ねることで、学生のアイデアを整理し、学生が自ら疑問点やその解決策を探求し、自らの考えを表現し、発信する力を養うよう支援している。さらに、支援員は相談内容によって適した空間を各スペースのなかから選択している。本件の事例は4.2にて述べる。

3.1.2. ワークショップ

学習支援者は、個別相談対応のほか、ラーニングコモンズの利用促進と学生への正課外学習を支援する目的で、平日の昼休みの時間にスタディスキル(学修のための技能)に関するワークショップ・シリーズを2014年度春学期に実施した。「英

語多読ワークショップ(全3回)」、そして「日本語ライティングワークショップ(全3回)」である。これらのワークショップでは、毎回必ず2人ないし3人で行うピア・ワークを内容に入れ込み、学生同士の学び合いの空間を提供している。

また、試験的な試みとして、2014年度秋学期より「出張ワークショップ」を実施している。

出張ワークショップとは、ラーニングcommonsで実施される授業の一コマを利用し、学習支援員がプレゼンテーションやレポート作成などのポイントをレクチャーし、受講生がワークを通じて学ぶものである。現在は教員による個別依頼にのみ対応しているが、授業連携の形として新たな展開を検討している。

3.2. 教育支援・ICT支援

学習支援カウンターでは、学生に対する学習支援だけではなく、授業やセミナー企画に対し、教員との対話を通じ、ラーニングcommonsを活用した教育プログラムの設計・実践の支援を行っている。

本学文化学部の大平睦美教授の担当する司書課程科目「学校経営と学校図書館」における、テレビ会議システムを活用した京都、福島、鳥根の小学校3校・1大学の遠隔交流学习では、ラーニングcommonsのICT支援員がシステムサポートを担当し、学習支援員がスペースの効果的な活用提案、データ分析の補助等を担当している(大平, 2014)。

また、2014年11月11日にラーニングcommons 2階パフォーミングスペースにて行われた理学部物理学科合同中間報告会(ポスターセッション)での利用スペース・掲示位置の提案をはじめ、ラーニングcommonsにおける授業・イベント等の効果的な活用のためのレイアウト・アドバイジングも実施しており、同時に利用履歴の蓄積を進めている。



図4. 個別相談対応の様子

データの蓄積を進めることで、本学におけるアクティブ・ラーニング型授業や、学生の主体的な学習の傾向を分析し、正課と正課外の接続を促す取り組みを進めている。

4. 実践事例とその成果

4.1. 個別相談対応実績

2013年10月から2014年10月末現在の個別相談件数は、計76件(グループ相談2件を含む)であった(図5を参照)。「日本語ライティング」の相談件数が多い背景には、キャリア科目を担当する教員との連携による利用の推奨が考えられる。

本学ラーニングcommonsにおける学習支援は、各スペースを活用し、学生の多様なニーズに応えた相談対応を実現している(図6を参照)。

本稿では、その中でも3か所の学習スペースを活用した事例を紹介する。

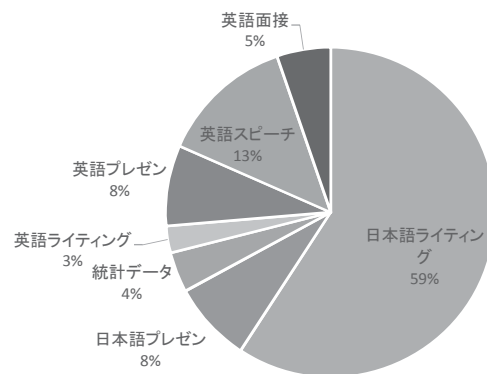


図5. 個別相談内容の内訳 (N=76)

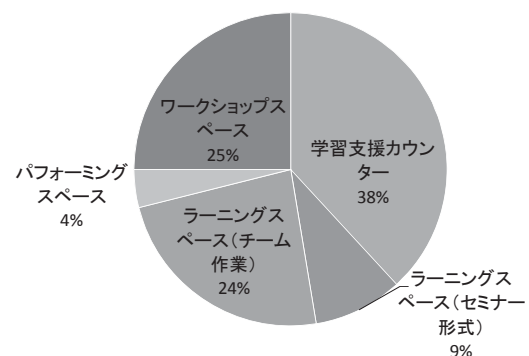


図6. 個別相談の実施スペース内訳 (N=76)

4.2. 相談対応における実践報告

本節で取り上げるグループは、練習の場としてラーニングcommonsを利用し、またプレゼンと発

表 3. 個別相談対応内容

月日	申込み時の相談内容	抽出した学習環境 ニーズ	相談員が選択し た学習スペース	相談対応
6/20	ゼミ発表リハーサルチェック (見せ方や話し方について)	プロジェクタ リハーサルのできる空間	パフォーマンス スペース	(1)発表時間を計り、各パートに時間配分を確認 (2)参考文献の書き方、インタビューを行った企業の情報、スライドのレイアウトに関してアドバイス (3)プレゼンの際の話し方、読み原稿を使用する際の注意点、発表時の目線についてアドバイス
7/10	ゼミ発表リハーサルチェック (データの活用について)	プロジェクタ リハーサルのできる空間 リハーサル後に個別対 応の可能な空間	ラーニングスペース (セミナー形式)	(1)各パートの時間配分と、スライド・発表内容の確認 (2)全体の流れから、必要な情報(グラフ・データの典拠)をアドバイス
7/11	発表スライドへの助言 (レイアウトについて)	すぐにPC画面を確認で きる空間 対面式の席による個別 対応の可能な空間	ラーニングスペース (チーム作業)	(1)発表用スライドと発表内容の確認 (2)レイアウトの確認や、効果的なアニメーション・見やすい配色、フォント、情報 の典拠方法について、参考書を利用し作成例を示しながら助言

表資料の改善に6月から7月にかけて計3回の日本語ライティング・プレゼンテーションの支援を受けた(表3)。

上述のように、個別相談では事前予約により希望日時を指定することが可能であり、その際、相談内容や希望する相談スペースを支援員に伝えることもできる。

本事例での初回の相談では、発表担当の4名が参加し、合同ゼミ発表に向けた見せ方・話し方に関する助言を希望した。支援員は最大100名の収容が可能なパフォーマンススペースを対応スペースとして選択し、発表時間を確認しながら、スライドのレイアウトや発表の際の読み原稿に関して適宜助言を行った。学生にとって本番に近い緊張感のある発表練習の場を提供し、その場で助言をすることで、より臨場感をもった的確な支援を行うことを可能にした。

2回目の相談申込みでは、発表およびスライド作成を担当する3名が参加し、前回に引き続き、発表用スライドと内容に関するアドバイスを希望した。発表資料の作成中ということ considering、支援員はプロジェクタを備えたラーニングスペース(セミナー形式)にて助言を行った。セミナー形式の空間を選択することにより、発表練習後に発表者に対する個別相談対応を可能とした。

そして3回目は、32inch モニタを常設し、対面での対応が可能なラーニングスペース(チーム作業)にて、スライド作成担当1名と個別相談対応を行った。前回の支援を踏まえて修正されたスライド資料の内容を確認しながら、スライドデザインやデータの出典などを中心に、発表の際に注意すべきポイントについて助言を行った。

当初は純粋に「発表練習の場」としてのみラーニングコモンズを利用していた学生たちが、第3者のフィードバックを受けることで、自分たち自身の考えや表現を深め、次第に聞き手を意識したプレゼンを心がけるようになっていった。特に、当初は下を向き、原稿を読んでいた相談者が、自

分からスライドの見え方、データの扱い方について積極的に質問をするようになり、相談員は3回の個別相談対応を通じ、利用者の意欲の変化を実感した。

4.3. アンケート回答

学習支援カウンターでは、2014年4月以降、個別相談終了後、学生に対し「アドバイスはわかりやすかったですか?」、「アドバイスをもとに文章/プレゼンを改善できそうですか?」という5段階評価の設問を含めた利用者アンケートを実施している。前者の平均値が4.7、後者が平均4.6であり、特に本事例の満足度はいずれの項目も平均4.8と、非常に高いものであった(2014年11月現在)。これは、相談に訪れる学生の多くが、これまで相談できる場所がなかったと相談中にこぼしていた言葉ともつながる。特に「自分では気づかない所を指摘してもらえるのでとても助かった」という本事例での学生のアンケートコメントが象徴的であるように、個別相談を利用した学生たちの中に、自らの学びを深めながらも、レビューを受けることの重要性に気づききっかけが生まれていることが明らかになっている。また、ワークショップでも同様に、参加者に対してアンケート調査を実施している。

アンケートを実施することにより、改善点を探りながら、参加者にとって正課外の学習の場としてスペースを提案し、かつ継続的な支援を行うことで、学生のニーズに対応した支援を実現している。

5. 現状の問題点と今後の課題

本稿では、雄飛館ラーニングコモンズのコンセプト構築の過程と、そのコンセプトに基づき展開される多様な学習スペースを活用した人的支援の実践事例を提示した。

本学ラーニングコモンズは、建設に先立ち、学

生へのアンケート調査で得た学生の生の声を参考としてコンセプト設計を行い、「クリエイティブな学びを好む群」がより一層のアクティブ・ラーニングを展開することができるように、また「クリエイティブな学びを好まない群」に対しても様々なサポートを展開することにより、アクティブ・ラーニングへの意欲を高める空間づくりを目指している。

探求型問題解決力という客観的に測定が困難な力を学生が身につけられるよう支援するには、根気よく学生と向き合い、学生の多様なニーズに耳を傾け、本学学生の学びに適した空間的・人的環境を提供していくことが求められる。

学習支援員である専門スタッフは、対話を通じて利用者の（潜在的な）学習環境ニーズを引き出し、そして支援員が立ち入れる範疇を理解した上で、気づきを促す支援を試行している。

本学ラーニングコモنزの運営、人的支援は開始されたばかりである。ラーニングコモنزの学内における認知度はもとより、支援体制も整備を進めている段階であり、特に、個別相談対応・ワークショップは、学内の周知方法のほか、相談者やラーニングコモنزの利用者に対して十分な支援を維持すべく、いかに支援員の質保証を行いつつ、その支援メニューを拡充していくかが課題となっている。

さらに、学生が用途、学習スタイルに応じて適切な学習空間を選ぶことができるよう、ラーニングコモنزと他部署との連携を強めていくことが必要である。

そして、何よりも学習者のニーズは多岐にわたる。そのニーズに適合した学習支援環境の構築とその整備のため、今後は学習ニーズを可視化する調査手法の考案とその結果得られたニーズへの支援展開を課題としたい。

謝辞

本稿作成にあたり、多くの方々にご協力・ご助言いただいた。心より御礼申し上げます。

本稿は日本教育工学会第30回全国大会での報告、千葉美保子、松井きょう子、呉斌傑（2014）「多様な学習スペースを活用した学習支援の試み：雄飛館ラーニングコモنز」へ大幅に加筆修正を加え、新たに執筆したものであり、文部科学省「経済社会の発展を牽引するグローバル人材育成支援」事業の成果の一部である。

注

1) 雄飛館ラーニングコモنزの各スペースや、イベント記録などの情報発信はラーニングコモنز公式サイトより確認が可能 (<http://www.kyoto-su.ac.jp/global/lc/>)

2) 学生スタッフの活動については、高等教育フォーラム第5号に所収の実践事例「ラーニングコモنزにおける学生スタッフ活動を通しての学生の成長」を参照されたい。

参考文献

- 大谷麻予, 中西勝彦, 松尾智晶 (2014) 初年次キャリア形成支援教育科目「自己発見と大学生活」キャリア科目担当学生ファシリテータ活動について. 高等教育フォーラム 4:pp.71-80.
- 大平陸美 (2014) テレビ会議システムを用いた3小学校による交流学习の実践と課題. 日本教育工学会第30回全国大会講演論文集: pp.305-306.
- 鬼塚哲郎, 中西勝彦 (2014) 低単位・低意欲層に向けたキャリア形成支援教育科目「キャリア・Re-デザインI」における受講生の変化. 高等教育フォーラム 4:pp.29-35.
- 岩崎千晶, 池田佳子 (2013) 考動力を育む“コラボレーションコモنز”のデザイン. 関西大学高等教育研究 4: pp.9-17.
- 児玉英明, 森洋, 山内尚子, 中沢正江 (2012) 学生情報の一元化による初年次修学支援システムの構築—学部別低単位基準を指標にした教職協働—. 関西地区FD連絡協議会・FD活動報告会2012.
- 佐渡島紗織, 太田裕子 (2013) 文章チュートリングの理念と実践 早稲田大学ライティング・センターでの取り組み. ひつじ書房, 東京
- Scott, B. (2012) 高等教育における学習スペースの設計に当たって最初に問うべき質問 ラーニングコモنز. 加藤信哉, 小山憲司 訳 ラーニングコモنز 図書館の新しいかたち. 勁草書房, 東京
- 千葉美保子, 松井きょう子, 呉斌傑 (2014) 多様な学習スペースを活用した学習支援の試み:雄飛館ラーニングコモنز. 日本教育工学会第30回全国大会講演論文集: pp.519-520.
- 中沢正江, 山内尚子, 久保秀雄 (2014) 質的な学生実態調査によるコンピテンシー概念の抽出手法の開発. 日本教育工学会第30回全国大会講演論文集: pp.721-722.
- Bonwell, C.C. & Eison, J.A. (1991) Active Learning: Creating Excitement in the Classroom (ASHE Higher Education Report Series (AEHE)).
- 溝上慎一 (2007) アクティブ・ラーニング導入の実践的課題. 名古屋高等教育研究 7:pp.269-287.
- 森洋, 中西勝彦 (2012) 京都産業大学における学生によ

る学生支援・教育支援の全体像. 全私FD連携
フォーラム 2012.

山内祐平 (2011) ラーニングコモンズと学習支援. 情報
の科学と技術 61 (12): pp.478-482.

山内祐平, 林一雅, 西森年寿, 椿本弥生, 望月俊男, 河西
由美子, 柳澤要 (2011) 学びの空間が大学を変える.
ボイックス株式会社, 東京

文部科学省 (2012) 予測困難な時代において生涯学び続
け、主体的に考える力を育成する大学へ (審議まと
め).

[http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/
chukyo4/houkoku/1319183.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo4/houkoku/1319183.htm) (2014.11.29 閲覧)

文部科学省 (2013) 学修環境充実のための学術情報基盤
の整備について (審議まとめ).

[http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/gijyutu/
gijyutu4/031/houkoku/1338888.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/gijyutu/gijyutu4/031/houkoku/1338888.htm) (2014.11.29 閲
覧)

A report of Learning support and Educational support that utilizes a variety of learning space at Yuhikan Learning Commons

Mihoko CHIBA¹, Kyoko MATSUI², Masae NAKAZAWA²

Yuhikan Learning Commons offers a learning environment that promotes and supports students' active learning with the motto of "Learn Together, Create Together". At the Kyoto Sangyo University (KSU), "active learning" refers to the practice of learning activities that consist of finding problems on one's own, contemplating and creating a solution, and testing it while putting it into practice.

In this paper, we will first introduce attempts to design the concept of the learning commons and the outline of a survey regarding learning environments and learning-support needs sought after by students at KSU in this process, as well as the results of the survey. Then, we will also present the concept design of the learning commons at KSU, which has been established with the collaboration of teaching and administrative staff and through cross-disciplinary efforts. Finally, we will report on cases of learning-support initiatives that make use of diverse sorts of learning space that take place in the learning commons according to learning formats, and the results of these

initiatives.

KEYWORDS: Learning support, Educational support, Proactive learning, Learning commons

2015年2月23日受理

1 Center of Presidential Affairs, Kyoto Sangyo University

2 Center of Presidential Affairs, Center for Research and Development for Educational Support.